《論文》

危機の葬送
――魯迅『孤独者』論――

(東京大学) 代田 智明

I. はじめに

1924年から25年のころ，魯迅が深いトラウマを背負い，心のなかに「暗闇」を抱えていたことは，比較的知られたことであろう。その背景を簡単に説明すれば，一つには，祖父の賄賂発覚による入獄という事件を中心とする忌まわしい出自と，それによって過ごした疎外された少年時代のこと。二つは，封建的な結婚を受け入れたこと。妻の朱安には気の毒な言い方になるが，これは半永続的な屈辱的体験として，日々直面することであった。むろんこの二つは，24年を取り立てるものではない。だがさらに三つは，1923年に同志的とも言えた弟周作人との不和決別が起こったのだ(1)。その子細はいまだ明らかではないが，家父長的態度を採ってしまったというような，何らかの責任や罪意識を魯迅自身が感じていたと推測することは可能のように思われる。

これらは一見，すべてプライベートな「瑣事」に起因するようだが，いずれも宗族的共同体としての家制度と深い関わりがある。まして現実こそ思想的検証の場であるという姿勢をもっていた魯迅にとって，明らかに抽象的かつ思想的課題でもあった。これらが総合されたとき，恐ろしい自意識を魯迅にもたらすことになっただろう。どんなに改革を唱えようと，新しい時代を導こうとしても，自分は決定的に，伝統的で，どうしようもなく「古い」，そういう存在から逃れられないという事実である。周作人との不和は，最高の同志を失ったというだけでなく，それまで潜在化していた精神的暗闇を，一挙に魯迅に悟らせたのではないか。

ちょうどこの時期，五四新文化運動も停滞と分裂の状況にあった。どうすれば改革できるのかは曖昧模糊とし，将来への道は暗中模索するほかなかった。魯迅の内面と外部で大いなる危機が迫っていたわけである。こうして，実存主義的な問いかけを象徴的なモダニズムの手法で表象する，そんな文学者魯迅の時代が生まれてくるのだった。

こういう時期に書かれたのが，魯迅の第二小説集『彷徨』である。題名が示すように，不透明な未来への遠い道を，さまよい歩きながら探し求めた，そんな気分がこの短編集の諸篇の端々に見られるといえよう。

作品集『彷徨』のなかで，とくに魯迅の精神的矛盾や葛藤を描いたテクストとしては，まず『酒楼にて』があるが，これは別に論ずる機会もあると思われる。より包括的に語るテクストと言えば，やはり1925年10月に書かれた『孤独者』を挙げなければならない。ただ，テクストそのものに直接入る前に，少し迂遠ではあるが，このテクストと作者との血縁関係を確認しておくべきだろう。

II. 私小説風読み解き

『孤独者』の主要登場人物である魏連殳の形象に，作者魯迅自身の体験と思考が色濃く投影されていることは，すでに疑念の余地がないように思われる。先行する『酒楼にて』の登場人物呂緯甫の外見や経歴にも，作者と類似した部分が見出せるが，それ以上に魏連殳には，作者との深い血縁関係が見られるのだ。これは近年，多くの論者がつとに指摘していることである。

この物語でも，『祝福』や『酒楼にて』と同様に，主人公と言うべき魏連殳のほかに，「私」と

いう狂言回し役の語り手が登場する。私はこれを物語構成技術上「入れ子型」構造と呼んでいる。なぜなら，テクスト全体を統括する語り手のほかに，テクスト内部にもう一人語り手がいて，まとまった物語を展開しており，その物語の方がテクスト全体としては印象的となる。逆に言えば，一つの物語を別の視点から見ている語り手が存在し，二人の語り手の間に対話構造が生まれているのである。竹内好は，そのことを「見る私」と「見られる私」と表現していた（竹内，54頁）。その見る方の語り手「私」が，初めて魏連殳に出会った場面で，魏の外観をこのように述べているのだ。

「彼はじつは，身体の小さなやせこけた人で，長くて角張った顔に，ぼさぼさの髪と真っ黒なひげと眉が，その半分を占めていて，両目だけが暗いなかにきらきら光っていた」(2)。

オーファン・リーは「外見が魯迅にそっくりだ」と指摘している（Lee, p. 84）し，王暁明に至っては，これは「彼［魯迅］が紹興で教えていた時の風貌とほとんど瓜二つだ」と述べる（王暁明，104頁）。

またテクスト冒頭，噂に出てくる彼の風評はこんな風である。「彼はちょっと変わり者で，学んだのは動物学だが，中学堂では歴史を教えている」。医学を学ぼうとして日本に渡った魯迅が，のちに文学の師となったことと，これは同じ具合のことだと，李允経は指摘している（李允経，198頁）(3)。また竹内やオーファン・リーは，北京大学や北京女子師範で文学史を講じたことと，ここの記述を関連づけている（竹内，54頁，Lee, p. 83）。

続くテクストにおいて，噂では魏連殳は「人に対しては，いつもどうでもよいというような態度だが，他人の世話を焼くのが好きだという。常日頃，家庭は破壊すべきだと言いながら，給料をもらうとすぐ自分の祖母に送ってしまい，一日として遅れたことがない」という記述がされる。別の箇所では「文章を発表するのが好きで」そのためにまずい立場になっていたが，それでも意に介さないなどの記述もある。既出王はこれらも「祖母を母親に置き換えれば，まさしく彼［魯迅］自身のことではないか」（王暁明，104頁）と述べている。

こうした，テクストに散見される作者との近似性は，それを認識した上で翻って，作者の自画像として読み返すと，魯迅の自意識として了解できて興味深い。他人に対する態度について，一見素っ気ないようでいながら，気になってしまうとのめり込んでしまうというわけだし，家庭については，その破壊を言いながら，じつは孝行を尽くしているというのである。作者が自己をそれなりに分析し，その内部矛盾を表出し，対象化がなされているという気配がここからも窺われる。このことは重要なことで，まず初めに確認されてよいことだろう。だが，魏連殳が作者の自画像であることを証すという点では，テクスト内部を越えて，はるかに直接的な証言があるのだ。

それは文芸評論家胡風の回想である。胡風は30年代の左翼作家聯盟の活動を通して，魯迅と知り合い，聯盟の書記として魯迅との連絡に当たるうち，その信頼をかち取り，自らも魯迅に師事した。いわば弟子とも言うべき，魯迅の身の周りにいた近しい人物である。

「「『孤独者』のなかの魏連殳には，范愛農の影があるんじゃないですか」と私は尋ねた。

彼は，考えもせず即座に答えた。「じっさいは，あれは私自身を書いたんだ……」しばらく黙って，それからこう言った。「もちろん，范愛農の影もあるが」と」（胡，8頁）。

范愛農は，魯迅と同郷の友人であり，魯迅の自伝的エッセイ集『朝花夕拾』に彼の名を冠した一篇がある。日本に留学して，魯迅とともに清朝打倒の革命に参加，辛亥革命後紹興で教師をしていたが，軍閥の圧力横暴によって職を失い，自堕落な生活ののち，事故か自殺か，川で溺死をした。いわば自己破滅的な人物である。後に述べるよう

に，テクストの魏連殳は語り手「私」に職の斡旋を頼んでおり，一方范愛農も，北京に移った魯迅が就職の手引きをしてくれると期待していたとの記述が，上のエッセイにある。また弟周作人も「この主人公の性格は，いくらか范愛農に似ている」と述べている（周遐寿，185頁）から，胡風の連想も決して的外れのものではない。

それだけにおそらく胡風にとって，この話は極めて印象的だったのだろう。強靱な戦闘者という，当時の若者たちが描く作者のイメージと，自己破滅型とも言える主人公との結びつきは，とびきり意外だったのかも知れない。胡風は人民共和国成立後，1955年に毛沢東の手で，反共産党反革命分子として弾圧され，長い獄中生活を余儀なくされた。引用の部分は名誉回復されたのちに発表された，きわめて断片的な一文である。

むろん，回想にはいくぶん記憶の脚色があるに違いないが，魯迅の最初の反応は，つい無防備に口に出してしまったという感がある。続く修正の言葉は，それにうろたえて取り繕った記録のようにも思える。それが却ってことの真実性を，余計に浮かび上がらせているように思えるのである。

だからこのテクストが，作者の自己分析的な，自己対象化的な自画像に関わることは，言を待たないところだろう。このことは，テクストの具体的な折々の展開のなかで，また詳しく触れることにする。そこでつぎに問題となるのは，挫折型の登場人物の設定によって，このテクストにもう一つの「定説」が生まれてくることである。

それは，先に書かれた『酒楼にて』との連関性のことである。竹内好は二つのテクストの主人公に触れて，「「魏連殳」は「酒楼にて」の「呂緯甫」の発展であろう」（竹内，134頁）と述べていた。オーファン・リーも，呂緯甫の孤独な「厭世家」的傾向が『孤独者』につながっていると述べている（Lee, p. 83）[4]。ある意味で，『孤独者』の主人公魏連殳は呂緯甫の後裔ということなのだ。また尾崎文昭は「『酒楼にて』と『孤独者』とは連続した作品で，さらに一歩踏み込んで人間存在の不条理性を探求したものだと言えよう」（尾崎，41頁）と指摘している。

さらにこの二つのテクストについて，竹内が指摘している，作者が「細心にはらっ」た「注意」についても触れておこう（竹内，135頁）。S（紹興）市がともに主要な舞台になっているのはともかく，『酒楼にて』において，呂緯甫がたどった都市，山陽，太原，済南は，『孤独者』の語り手「私」が立ち寄った街としても記されていることである[5]。この符合も，なるほど作者の意図的な用意を窺わせるものだ。

確かに，呂緯甫の葛藤と苦悩は，魏連殳に引き継がれている。冒頭述べたように，とりわけこの時期，作者の精神的危機に直面した試行錯誤として，両者は強い継承関係があるだろう。けれども，魏連殳は呂緯甫の単なる生まれ変わりなのではない。呂緯甫の抱える危機や矛盾は，細かく見ていけば変形もしくは質的な変化をしている。同じように，『酒楼にて』の抱えるテーマが，単にそのまま『孤独者』に受け継がれ，深化しているわけでもないのだ。

両者は確かに，ネガとポジの関係にあると言えるだろう。だが，どちらがポジで，どちらがネガだとは，場合や視点によって異なってくるから，断定できない。片方をポジであるとすれば，もう一方はネガになるということである。

物語の展開から言うと，『孤独者』は『酒楼にて』のように，中途半端な終わり方ではなく，悲劇的結末によって，つまりある種のカタルシスを通して，テクスト全体をも質的に変化させている。つまり両者の間には，関連性とともに，くっきりした食い違いというか，断絶もしくは亀裂が走っているのだ。それはまさしくネガとポジの関係のように，ある意味で反転しているとも言えよう。その反転をもたらしたものによって，実のところ，

矛盾と葛藤に満ちた『彷徨』の世界が，ある転換をみせたと言ってもよい。その意味では，このテクストは『狂人日記』や『阿Q正伝』ほど有名ではないけれども，魯迅の小説としては，決定的な作品と考えることが可能になる。それは竹内好が「全部の作品のなかで，一番多く問題をふくみ」「この作品がわかれば魯迅がわかるような気がする」（竹内，134, 137頁）と言っている意味でもあるのだ。

Ⅲ．外部への通路

竹内の意味するところを確認するために，『酒楼にて』を視野に入れ，参照しながら，テクストに沿って物語をたどっていこう。最初に概括しておくと，テクストは五節に区分されている。第一節は，語り手の「私」が最初に魏連殳に出会った場面，魏連殳の祖母の葬儀のシーンである。第二節は，失職した「私」が魏連殳の借家をたびたび訪れ話し合う場面。第三節では，魏連殳の職も窮地に陥り失業。ここで「私」との間で，孤独な生のあり方が語られ，議論がなされる。第四節は，魏連殳の「私」宛の書簡を中心とする記述，志を捨てて，軍閥の幕僚となったことを告げている。第五節は，その後，魏連殳は自己破滅的な生活を送って，病死してしまうのだが，その葬儀の場面。

語り手「私」がのっけから述べるように，物語は「葬儀に始まり，葬儀に終わる」のであった。なおこの五節全体を通して，「孤独者」の形象が語られるに違いないが，魏連殳にとっては，三つの生き方がそこに提示されていると考えてよい。このなかに，『酒楼にて』の登場人物呂緯甫と語り手「私」のそれぞれの生き方もまた，形を変えて俎上に上がっているのである。これはテクストに従って，以後いくらか述べられるであろう。

さて「私」が魏連殳の名を聞くようになったのは，彼がS市でしばしば話題の人物だったからである。これはよい意味で有名だというのではない。古い秩序に慣れた人の眼からすると，既述のように「変わり者」として，はっきり言えば「厄介者」，スキャンダル・メーカーとして，話の種を提供していたということである。

ある年の晩秋，「私」は寒石山というS市から往復に四日はかかる山村の，親戚の家に遊びに来ていた。親戚は魏連殳の本家筋にあたるのだが，そんなときに疫痢が流行って，魏連殳の祖母が感染し，危篤状態に陥る。魏連殳は幼い頃に両親を亡くし，この祖母が辛酸をなめながら彼を育て上げたのだった。身寄りは彼の他にはなく，身のまわりの世話をする女の雇い人が，側に一人いるだけだった。祖母は「どうして魏連殳に会わせてくれないの」という言葉を最後に，息をひきとってしまう。危篤の知らせを持った使いが，その前に走ったので，おっつけ魏連殳が寒石山にやってくるはずであった。「私」はその葬儀の場面に居合わせることになるのである。

この山村には，小学校すらなく，彼以外に外に勉学に出たものもいない。人々は，魏連殳を「外国人のように見なし」ており，自分たちとは「まったく違う」存在だと考えていた。彼らにとって，魏連殳はまさしく「異類」であったが，一方では，留学してしこたま金もうけをしたに違いないと思いこみ，妬んでもいた。

そこで，家長をはじめとする魏一族を中心として，宗族共同体が結集し，祖母の葬儀をどうするか，対策会議が開かれることになる。なぜなら，魏連殳は嫡孫として喪主を務める立場にいるが，「新党」であり「外国の感化を受けた」[喫洋教]彼は，きっととんでもない，新しいやり方を主張するにきまっているからである。衆議の結果，すべて従来のまま，白い喪服を身につけ，遺体にぬかづき，僧侶や道士に儀式を委ねるという，三項目を要求することにした。魏連殳が到着したら，「みんなで広間の前に集結し，隊伍を整え互いに呼応して，圧力をかけて断固とした談判に持ち込

もう」というのである。こうした事態を知った，ほかの村人たちは，必ずや一悶着あるだろうと「固唾をのみ，珍しそうに聞き耳を立てた」。そして「もしかすると思いもかけない景観を生み出すかも知れない」と心躍らせたのである。

ここのテーマは，親族の葬式をめぐって，宗族共同体の伝統との関係を扱っている。言うまでもなく，形式化し，固陋になった儀式のあり方が，真情として悼むことの表現を押しつぶそうとする事態を，描いているのだ。その暗闇の描き方は，引用からも一端が知れるように，魏一族の大袈裟な対応といい，村人の猟奇心といい，決しておどろおどろしいというものではない。むしろ軽妙でユーモラスな感じすらするだろう。ここですでに，二つのことに，気を着けておかなければならない。

冒頭では，先に引用したように「常日頃，家庭は破壊すべきだと言いながら，給料をもらうとすぐ自分の祖母に送ってしま」うという，孝の意識または家族共同体への執着が，作者本人の自嘲のように語られていた。それが，むしろあっけらかんと，軽々と語られていたことに注目しておきたい。『酒楼にて』のなかでは，自己の思想に唾棄すべき伝統が内在化しているという深刻な矛盾した心理状態が，濃厚に表現されていたが，ここではそう表白されることによって，むしろ矛盾は回避されているのである。

この葬儀の場面で注目すべきというのは，一つは『酒楼にて』のように，内在化された空虚な伝統との葛藤に重点があるのではなく，ここでは伝統は，古い秩序の力量として，外在的な圧力の形で表象されることである。上に述べた魏一族の行動が，それを端的に示すだろう。もう一つは，『酒楼にて』では決して登場しなかった形象があることだ。それは，『吶喊』以来魯迅の小説が執拗に糾問しつづけ，憤り憎んだもの，つまりは，他人の災難や騒ぎを見物したがる傍観者的民衆のことである。『彷徨』では既に『見せしめ』において，その形象が見事に描かれていたが，ここでもその姿が復活しているのだ。

そうした古い社会の外的圧力に対して，魏連殳はどう対応したのだろうか。作者はいったん内面化された矛盾と危機を透過して，もとの『吶喊』初期のような，絶望的な啓蒙という，パラドキシカルな位置を回復しただけなのだろうか。

魏連殳がやってきて，祖母の遺体にお辞儀をすると，一族の長老たちは，打ち合わせ通りに行動する。「まずはながながと前置きを語り，続いて本題に入って，そこでみんながつぎつぎ口裏を合わせ，あれこれ並べ立てて，彼に反駁の余地を与えなかった」。話がすべて終わり，沈黙が訪れると「全員がぞくっとして，彼の唇をじっと見つめた。すると連殳は少しも顔色を変えず，ぽつねんと答えた――『すべて了解しました』」。

これはまったく思わぬ事で，一族の者は当座ほっとしたものの，この「奇怪」さには何かまだ裏があるのではないかと不安で，疑心暗鬼になった。第三者の村人たちは，あっさりと事が済んでしまって失望したが，やはり「見に行こう」と期待して，広間の前に集まってきた。ところが魏連殳は，しきたり通り，従来の作法で完璧に葬儀を遂行し，寸分の違いもない。それには「端で見ているものも感心せずにはいられなかった」し，「白髪混じりの老婦人は，羨ましそうに感嘆の声をあげた」のである。

なおこのシーンは，1910年に行われた，作者魯迅自身の祖母の葬式をなぞったものだと言われる。このことは当時，病床の祖母に付き添っていた，下の弟周建人の回想によって証すことができよう（周建人，285－260頁）。それによると，祖母の発病から，葬儀の進行に至る，テクスト第一節の叙述全体は「その年に義理の祖母を埋葬したときの実際の情景と，ほとんどそっくりである」（李允経，200頁）というのだ。

むろん余りに「そっくり」な細部については，

物語の言語によって記憶が，逆に引きずられた可能性を否定できない。しかし，周作人も母からの伝聞として，ここの叙述がおおよそ事実に合致していることを記している（周遐寿，187頁）ので，魯迅自身の体験が基になっていたことは否めないだろう。ただこの場面は，伝統の圧力を，回想によって確認するために描かれたわけではあるまい。つづく魏連殳の行為が，やはり大きな意味を持ってくるからである。

セレモニーが高見に達して，泣き女が泣き，棺に釘打たれたとき，人々は怪訝で不満そうな様子を見せる。語り手の「私」はこのとき気づくのだが，魏連殳は「一粒も涙を流さず，筵に座ったまま，両目を暗い中にきらきら輝かせていた」。葬儀が終わろうとし，人々は見ものは何もなかったとがっかりして帰ろうとしたとき，「突然，彼［魏連殳］は涙を流した。続いて声はかすれて，すぐに号泣に変わり，まるで傷ついた一匹の狼が，深夜，荒野に遠吠えをするように，凄惨の中に憤りと哀しみを滲ませていた」。

こんなことは前例もなく前代未聞で，人々はうろたえ，なすすべがなかった。しばらくしてやっと何人かがやめさせようとしたが，彼は号泣したまま，そこをいっかな動かなかった。そのまま30分ほど泣くと，彼は弔問客に挨拶もせず，祖母の部屋に入って寝てしまう。

そして二日後には，さらにこんな伝聞が伝わってくる。彼は家具のほとんどを焼いてしまい，余ったものは祖母に使えていた雇い人に与え，家屋も彼女に無期限で貸すことにしたと。一族がこぞって反対して，必死に掛け合ったが，彼は聞かなかったし，それを村人たちは，「悪魔に出会った」かのように，驚愕して語り合うのである。

この祖母の葬儀の場面では，伝統の圧力と傍観者たちの好奇心とを，やや戯画的に，滑稽な形で，印象的に描いている。すでに述べたが，暗黒が底知れないものとして描出されたわけではなく，それ自体は後景化されているのだ(6)。さらには，『酒楼にて』で描かれた，暗黒を目の前にしてにっちもさっちもいかない状態も，ここではほとんど意識されない。ここでむしろ前景化されるのは，こうした暗闇に対する対処法，いわばその暗闇のなかで生きる形，姿勢のようなものである。それは，抵抗の要素はあるが，決して正面からの闘いとは言えなかった。一種のシニカルな「方法」なのである。

方法とは，魯迅流の「復讐」であった。復讐というのは，このテクストより10カ月ほど前に，散文詩集『野草』の一篇として書かれた『復讐』一文における「復讐」の意味である。この小品のなかで，魯迅は全裸の二人の男女が刃を手にして，向かい合う形象を提示し，それを物見高げにわくわくしながら見つめる傍観者たちを描く。そうして，二人が向かい合ったまま，じっと何もしないことで，傍観者たちの退屈と失望を導き，彼らを裏切り，復讐を果たすというものである。長年，作家魯迅がこだわり続けてきた，傍観者的民衆に対する批判の総決算という趣もあり，傍観的態度に対する，魯迅流の抵抗が描かれていた。

そこで，李允許の指摘するように，一族と村人に対する魏連殳の対応は，ほとんどこれに似た「復讐」であると考えられる。「村にいる観客に対する報復であり，彼らに見るべき芝居をなくさせるのだ」（李允経，210頁）。一族に対しても，村人に対しても，魏連殳の言動は，彼らの予想や思惑をすべて覆す。上に述べた断片を拾って，その結果を羅列すれば「不安や疑心暗鬼」「失望」「怪訝で不満な様子」「うろたえてなすすべがなく」「悪魔に出会ったように驚愕させる」といった具合なのである。

むろんすべてが，意図的に人々の裏をかこうとする，計算された行動というわけではない。とくに，狼の遠吠えのような号泣は，真情から出た思いのたけの表現であったろう。だが狼というこの

表象すら，作者の小説の中では，実は復讐と緊密に結びついたシンボルとして登場するのである。

それは，このテクストから２年余り後に書かれた『鋳剣』の一節だ。この物語は，国王に父親を殺された眉間尺という少年が，仇を討とうとするところから話が始まる。そこにデモーニッシュな形象をもつ「黒い男」が現れ，軟弱で未熟な眉間尺に，替わりに敵を討ってやろうと申し出る。「黒い男」が，仇を討つ替わりに眉間尺の首を所望すると，彼は自分から首を切り落として，「黒い男」に渡す。その場面の背景に狼が登場するのだ。

杉の森の奥深く「燐の炎のような眼がきらきらとうごめき，突如近づくにつれて，はぁはぁという飢えた狼の喘ぎ声が聞こえた」。先頭の狼は眉間尺を食べ尽くし，「黒い男」に襲いかかる。「黒い男」がその狼を斬り殺すと，つぎの狼が，その遺骸を食べ尽くした。

このシーンの解釈は，そう単純ではない。眼としての狼は，『阿Ｑ正伝』では傍観者的民衆のシンボルとして，阿Ｑの魂に噛みつき粉々にする場面にも出てくるからだ。ただ，湯山トミ子が指摘するように「鬼火のような眼」をもった者として「狼と黒い男が同一の者である」と想定することも可能である（湯山，84－85頁）。ついでに言えば「両目を暗いなかにきらきら光らせていた」のは葬儀における魏連殳でもあった。だから狼を「復讐」のメタファーとして，「復讐」との結びつきに注目しておきたいのだ。

こうして，祖母の葬儀における魏連殳の言動は，圧倒的な伝統的宗族秩序に対する，形を変えた抵抗を示すように思える。それはおそらく，『酒楼にて』以降，作者が試みたあらがいや格闘と関連していることだろう。そのなかで再び，傍観者的態度が，最も憎むべきものとして作者の眼前に立ち現れても来たのだろう。出来事自体は，10数年前の事実に取材して，それにかなり忠実であるようだが，心的表象としては，この数年の作者の姿を概括しているように思われるのである。しかも『酒楼にて』が，完全な内的な対話であって，外在的な「敵」が意識されていないのに比べると，このテクストでは，少なくとも外への通路を獲得しているといえるのだ。

しかし，指摘しておかなければならないのは，このような「方法」によって，伝統的秩序を何ほど変えることができるのだろうか，ということである。誰の目にも明らかなように，伝統の力は厳然と存在したままであろう。その意味で，心のなかに伝統との葛藤を抱え込んでいた状態から，作者は一歩外へ向けて踏みだし，伝統を外的対象としているが，それに釣り合う自己の姿勢はまだ閉ざされたままなのであった。そのことが，第二節以降で「私」という語り手を媒介にした，いくつかの対話によって，さらに対象化されていくことになる。

Ⅳ.「孤独者」という人間像

「私」は寒石山からの帰り際に，弔問に訪れ，魏連殳に直接会うが，このときは彼は儀礼的にあいさつを返しただけであった。二人が親しく話をするようになるのは，Ｓ市においてである。「私」はその年の末に失業してから，足繁く魏連殳の所を訪れるようになる。

それは魏連殳が「性分としては，付き合いがひどく悪いのだが，不遇な人には優しい」ということを耳にしたからだった。不遇な人が，いつまでも不遇のままではないから，「彼には長い付き合いの友人は少ない」らしかった。その噂は本当で，魏連殳は「私」を暖かく迎えてくれる。そして知り合ってしまえば，話はしやすかった。

「彼は議論好きで，その議論もとても突飛であった。参ったことというと，彼の何人かの客のことで，『沈淪』を読んだためでもあるのだろう。彼らはいつも「不幸な青年」とか「余計者」だと

か自称し，カニのように，怠惰で居丈高に大きな椅子に座り込むのだ。そうして悲哀の声を挙げ，ため息をつく一方で，眉に皺をよせて，たばこを吹かすのである」。

ここの叙述も，当時の作者と，世間に認められない文学者気取りの青年との関係をほうふつとさせる。魯迅は，五四運動当時は，いささか純粋にすぎる進化論者であったから，青年というと期待を寄せて，あれこれめんどうを見ていた。その中には，むろん生涯の知己となった人たちもいたが，厭世家を気取って群がって来た者も多かったのである。またここの場面は，「私」の眼を通した叙述ではあるが，自画像として読めば，若者に対する人間関係について，作者の自嘲的な意識が窺えて興味深い。ただしテクストとしては，魏連殳がそう思っているわけではないことは，確認しておこう。

なお『沈淪』は郁達夫の小説で，日本に留学し，学業や恋愛に思いを遂げられず，祖国の弱さに絶望して，自殺する青年の心理を描いた物語である。性意識の記述もあったため，頭の硬い道徳家の非難も浴びたが，20年代初めに一世を風靡した。ついでに述べると，『孤独者』全体の時代背景としては，辛亥革命直後の雰囲気をもつのだが，この郁の書名によって，五四運動以降だと論定されているそうである（林非，195頁）。

さてこうした，青年に対する「私」の視線のうえに，さらに子どもに関する対話が，ここには展開されてくる。魏連殳の借家の大家には，孫である4人の男女の子どもがいて，ときどき魏連殳の部屋に闖入してくるのだ。彼らは汚れていて醜いし，「けんかばかりして，皿やお椀をひっくり返すわ，菓子を無理やりねだるわで，めちゃくちゃで頭が痛くなる」。むろんそれはあくまで「私」の視線だ。ところがこの来訪によって，「連殳の眼には，たちどころに喜びの光が湧き起こ」り，彼らのことを「自分の命より大切に思う」のであった。ここに対話的関係が，まず生じている。

魏連殳は，子どもたちの不作法に苛立つ「私」に気づいたように，はっきりとこう語る。「子どもというのは好いものだよ。彼らはまったく純真で……」。そうとも言えまい，という「私」に対して，大人になってからの悪い性分は，環境のせいで，初めからではない，と彼は主張する。それに対して「私」は，悪の種が初めからなければ，どうしてそれが後に，芽生えて果実をならせることがあるだろうか，とかじったばかりの仏教の理論で反駁する。魏連殳は腹を立てて黙ってしまい，「私」は気まずいまま，彼の部屋から逃げ出すこととなった。いわばけんか別れになってしまったのである。

ここでは，この対話は決着を見ない。「私」は失職したのち，仏典を読みかじっており，それでこんな反論をしたのだが，仏典については，作者自身と些か関わりがあろう。辛亥革命が挫折したのちに彼は，仏典などの古い書物を読みふけっていたことはよく知られている。五四退潮期ののちも，『野草』の諸篇などには，仏教用語が散見される。先に述べた，『復讐』2編に「大歓喜」と「大憐憫」の語が見られるように。語り手「私」にもまた，他のテクストと同様，作者のもう一つの影が投じられていることには違いない。

さて3カ月ほどして，彼は初めて「私」の住処を訪れ，悲しげにこう言う。「君の所へ来る途中，街で小さな子どもに出会った。一枚の芦の葉を手にして，私を指さして「死ね」と言うんだ。ろくすっぽ歩みもおぼつかないのに」。彼がけんか別れした「私」を許す気になった一つが，「彼自身が，「純真」な子どもに敵視された」からだと，「私」は推測する。

さらに第三節では，魏連殳はその年の春に校長を辞職（これも魯迅の伝記事実に符合する）して，「私」と同じく失業する。そんな彼の窮乏を知って訪れた「私」との対話の最中に，こんな一段が

現れるのだ。
「彼は耳をそばだて，ピーナッツを一掴みして出ていった。外では大良たち［大家の孫］の笑い声がしていた。

ところが，彼が出ていくと子どもたちの声はぴたりと止んで，どこかへ行ってしまったようだ。彼は追いかけてゆき，何か声をかけたが答えはない。彼もがっかりしたようにひっそりと帰ってきて，そのピーナッツを紙袋にもどした。

「私のは，食べ物すら，口にしないんだ」彼は低く，自嘲的に言った」。

世間から白い眼で見られている者が，子どもたちにすら，毛嫌いされる事実が描かれる。つまり，この問題をめぐる対話は，テクストでは，ほぼ決着を見ていると言えよう。後に志を捨てた魏連殳は，子どもたちを馬鹿にするように，物を買ってやる代償に，ピエロのような仕草をさせる。そこには，かつてのような愛着と愛護の気持ちは，毛頭見られないのであった。

こうして，青年や子どもは，大人のように悪い習慣に染まっていないから，彼らが健全に成長すれば，社会はよくなるだろうという，楽観的な進化論の立場は，テクストによって放擲されているに近いのだ。そうした立場は，かつて作者が期待を寄せ，主張したことであった。だからこれは，かつての自己を対象化しただけでなく，否定的にすら扱っているわけである。ただ魏連殳の色濃い哀しみのなかに，かつての作者の思いが反映されていることも，確認しておくべきことだろう。

ところで，魏連殳が「私」を訪れた理由というのは，いとこの子を彼の養子にしようと，その親子がやってきているから，いまは訪ねてくれるな，ということであった。養子にすれば，彼の寒石山にある唯一の財産，つまり祖母の雇い人に貸している家屋が，自分たちのものになるからだ，と彼は述べている。「私」は，結婚せず跡取りがいない彼の血統を，本家筋が心配しただけで，昔風の古い発想にすぎないのじゃないかと釈明する。この対話構造は子どものテーマに比べると，明示的ではなく，ささやかではあるが，なかなか興味深い問題をはらんでいるのである。

一つは，魏連殳は子どもについて懐疑的な「私」を非難したが，親族の言動については，「私」よりずっと懐疑的なことだ。社会にというより，まずは宗族共同体に対して同化できない，信頼しない。その意味で，これは後で触れるいわゆる「孤独者」のイメージに結びつくだろう。そしてそれは，既述したように，作者の宗族共同体に対する，愛憎の交じった心境とも一致することであった。

もう一つはここで，「私」がこの対話に絡んで，前から気になっていたことを尋ねたことだ。「君はいったいなぜ結婚しようとしないんだい」。この問いに，魏連殳は驚いたように「私」を見返し，それから視線を自分の膝に移して，たばこを吸うばかりで答えようとしない。

テクストはここではこれ以上何も言及しないが，第五節でも似たような問いがなされていた。幕僚となって金回りのよくなった彼に，大家が所帯を持つことを勧めるのだ。だが彼は笑って取り合わない。この問題は，魏連殳という形象を理解する上では，重要に思われる。というのはそれは，彼の「病状」と関わりそうだからだ。第四節の「私」宛の手紙のなかでは，「いまはもう深夜だが，いくらか吐血したので，目が覚めた」という記述があった。彼は自分が肺病を患っていることを，自覚していたと推定されるのである。

このことは，実は作者自身の結婚観とも重なっていると考えられる。なぜなら，魯迅自身も，早くから自分の肺病に気づいていて，そう長くは生きられないと考えていた節があるからだ。だから，無理やり母から押しつけられた結婚についても，相手の朱安に長い苦痛を与えることはあるまい，という心づもりであったと推定される。それはそれで無責任な対応ではあるが。

そうすると，母親の強引な手だてがなければ，作者の結婚に対する態度は，実は魏連殳と同じになった可能性が高いのではなかろうか。魏連殳が「私」の問いに，答えなかった背景には，こうしたことが連想できるのである。

さて「私」と魏連殳との対話には，もう一つ大きなテーマが残っている。それはテクストの題名にもなっている「孤独者」について。つまり魏連殳の最初の生き方についてである。

既述のように，魏連殳は子どもたちにピーナッツを与えようとして，逆に嫌われてしまう。「私」はしょげている彼を見て，こう語りかける。「ぼくには君が自分から苦しみを探しているように思えるよ。君は世の中を余りに悪く見ている……」。魏連殳を訪れる客たちがみな，暇つぶしに来ると彼が思っていないか，という「私」。そう思うこともあるという魏連殳。「私」はそこでこう述べる。「人間は実際はそんな風じゃないんだ。君はまったく，自分で蚕の繭を作って，自分をそのなかにもぐり込ませてしまったんだ。もう少し世間を明るく見るべきだよ」。

これに対する魏連殳の答えが，対話関係を構成する。「そうかも知れない。だが，その繭を作る糸はどこから来たと言うんだ。事実世の中には，そういう人はいくらでもいるさ。たとえば，ぼくの祖母だ。ぼくは彼女の血は受け継いではいないが，彼女の運命は受け継いでいるのかも知れない」。

祖母は，父の継母であり（これも作者魯迅の場合と同じである），一日中窓の下に座って，針仕事をし続けていた。笑みも見せず，つれない様子ではあったが，魏連殳のことをしつけ，かばってきた。継母という立場から，他の家族からは，あまり暖かく受け入れられたのではなかった。しかし，父の死後もずっと，祖母の針仕事によって家計は支えられてきた。そして祖母の葬儀の時である。「けれど，ぼくはあの時どういう訳か，彼女の一生が目の前に凝縮して浮かんだんだ。自分で孤独を作り，それを口に入れて味わった人の人生が。しかもそういう人は他にもたくさんいる。こうした人たちが，ぼくを号泣させたんだ」。「君のぼくに対する考えは，かつてはぼくの祖母に対する考えだった。けれども，その時のぼくの考えは，実は正しくなかったんだ」。

この対話は，さらに連想すれば，後にパートナーとなった許広平との書簡によるやりとりをも思わせるものだ。このテクストが書かれる半年あまり前（25年3月）に，二人は文通を開始していた。たとえばこのテクストから1年ほど後の二人のやりとりは，この対話を前提に読むと興味深い。同居を躊躇してアモイでぐずぐずしている魯迅に，許広平がしびれを切らしてなじっているのだ。

「けれども別の方ではいつも，たぶん「（将来を）私自身は目にできない」とか「静かに永眠する」……とかいう終わりに行き着くのを好む言葉に触れます。小鬼［許広平のあだ名］はこういう言葉を聞くのは不愉快です」（黄仁沛編，65頁）と。

これに対し魯迅はこう答えている。「自分の考えを人に伝染させたくないということです。どうしてかと言えば，私の考えは暗すぎて，自分でも正しいかどうかはっきりと確認できないからです。「やはり反抗したい」については本当ですが，「反抗する理由」が小鬼とはまったく違うことも，私は分かっています。あなたのは，光明の到来を望んでのことでしょう（私はきっとそうだろうと思います）。しかし私のは，暗闇とやみくもに格闘することにすぎません」（同上，69頁）。暗闇と闘う意志ははっきりしているが，その姿勢が「蚕の繭」のなかにもぐり込むようなあり方でしかなかったことが，ここに表白されていると言ってよいであろう。その繭の糸は，いわば暗闇と闘うところから来ているのだ。そこでテクストは，こうした対話の結末をどう導くことになるのだろう

か。

ここでは，世の中からほとんど見捨てられ，厭なこともじっと一人で耐え忍んで，生きてゆくほかない，そういう人生の系譜が強調され，語られている。従って，オーファン・リーのように，「孤独者」を「厭世家」とのみ捉えるのは，この形象を狭めてしまうことになるだろう。魏連殳が語るこの「孤独者」の系譜は，過渡期に特徴的なものというより，もはや歴史を越え，普遍的に提示されている気配すらするのである。

なお既述のように，魏連殳の生き方は，テクスト全体のなかで，三つの形が提示されていると考えられる。それは雰囲気として継続性をもつから，魏連殳の形象を分裂させるわけではない。広義の「孤独者」像はテクスト全体を通して表現されていると言うべきだろう。しかし，狭義としての「孤独者」の形象は，その三つをすべて貫通して含んでいると考える必要はないと思われる。ここで述べられた第一の生き方が，「孤独者」を典型的に表しているだろう。残りの二つは，後で述べるが，狭義の「孤独者」からの離脱または反面の生き方を提示するのである。

ところで，既に述べたように，魏連殳は議論好きで，しかも歯に衣着せぬ突飛な論旨を発表して，周りなど眼中になかった。S市の人々からは，奇人として見られていたのである。だからこの形象が，初期魯迅が思い描いていた「英雄」の末裔に当たることは，『魔羅詩力説』などの初期のテクストを知る読者には，容易に理解できるだろう。「英雄」は「腕を振るって呼びかければ，応ずる者雲のごとし」（『吶喊』自序）というはずであった。だが彼らは，傍観者的民衆によって，憎悪と迫害の対象にされ，最後にはいけにえとなって，見殺しにされるのであった。このため，「英雄」たろうとした者も，「英雄」の末路に共感した者も「激しい哀しみ」に襲われ，「この寂寞は日一日と成長して，大きな毒蛇のように，私の魂にまとわりついた」（同上）のである。

ここで注目したいのは，そういう目覚めた「英雄」の末路と，社会の隅にひっそりと，しかしひとり歯を食いしばるように生きた，祖母のごとき人物の生涯が，重ね合わされてくることであろう。「孤独者」の形象によって，時間を超えた系譜が提示されているばかりでなく，階層的な区分も超えた系譜が提示されているのだ。この系譜が，伏流のように中国社会の底層を流れていた。「孤独者」は，もとより名の通り，ばらばらで孤立しているが，「運命を受け継ぐ」系譜として，拡がりと一般性を獲得しているのである。

そこでやや余談になるが，こんな発想は突飛にすぎるだろうか。この「孤独者」の系譜を百八十度逆転させると，ちょうど『中国人は自らを信ずる力を失ったか』（『魯迅全集』第6巻，117－119頁）で述べられる「中国の背骨」になるというのは。作者は，30年代に入って，未来にいくばくかの希望を見出していたと言われる。そんな9年余りののちに，彼はこんなことを書いていた。

「我々には昔から，没頭して仕事に努めた人，必死にやり抜こうとした人，民衆の代弁者となった人，身を犠牲にして真理を求めた人……がいる。帝王宰相の系図に等しいいわゆる「正史」であっても，なかなか彼らの輝きを覆い尽くすことはできなかった。これこそ中国の背骨である。

このような人々は，現在でもいなくなったわけではない。彼らは確信があるが，自分を騙しはしない。彼らは倒れてもその後を継いで闘っているが，しかし一方では，つねに虐待され，抹殺され，暗闇に消え去って，人々に知られることができないでいるのだ」。そして，そうした彼らの力を確かめるためには，「自分で地の底まで見に行かなくてはならないのだ」と（同上，118頁）。

この「中国の背骨」こそ，「孤独者」が反転した形象ではないか。彼らは，営々と社会の変革に携わりながら，「人々に知られることが」なく，

抑圧され，抹殺されているというのだ。いわば「孤独者」の形象が，別の形で復活していると言えないだろうか。あるいは初期の「英雄」像が再生しているとも言えるだろう。

だがむろん，両者の間に，大きな落差があることも言うまでもない。「中国の背骨」が，変革の原動力として捉えられているのに対し，「孤独者」に，そうした可能性を見出すことは難しい。それこそ，両者は反転しているのであって，否定によって媒介されていると言うほかないだろう。

「孤独者」は作者の自画像であるとともに，そうした生き方を普遍化，一般化し，対象化したものでもあった。そしてそれは，いったんは否定されなければならなかったのであり，事実テクストによって否定されていると言ってよいのである。

こうして物語は，第四節の魏連殳による告白につながっていく。そこでは「孤独者」としての生の姿勢が持続していないことが語られる。そして第三節の終わり，「人が死後その人のために泣く者が一人もいないようにするのは，たやすいことではないね」という魏連殳のことばは，続く展開にとって，きわめて暗示的なのであった。狭義の「孤独者」の崩壊は，ここにすでに予兆が示されていると言えよう。

V.「人道主義」と「個人的自由主義」

さてともかくも，「私」はなんとか，山陽という街の教職にありつくことができた。魏連殳は「私」の出発する前の晩――物語の展開から考えて，秋口であろう――にやってきて，「筆写係」でもいいから職はないか，と頼みに来る。「私」は魏連殳のおもねるような態度に驚いていると，彼はこう語る。「ぼくは……ぼくはもう少し生きなければならない」と。おもねっても生きのびたいという点に，すでに「孤独者」の生き方とは異なる要素を見出すことができる。

だが現地に行ってみると，彼のための仕事探しは，うまくいかなかった。それどころか，「私」は，学生運動を煽っているという嫌疑がかけられ，気楽に外出もままならない状態になる。「私」は何度か魏連殳に弁解の手紙を出すが，返事はなかった。

「私」は夢のなかで，「もう少し生きなければならない」ということばを聞き，そう語る魏連殳の表情を見る。それほど印象的な言辞であったということだろう。そんなとき，突然に魏連殳からの手紙がやってくるのである。冬の十二月のことであった。

「私」への宛名は「申飛」となっており，これは魯迅が以前使ったペンネームの一つである。もはや明白に，作者の自画像という分身から，作者のもう一人の分身へ宛てた手紙という，意図的な布置なのであった。ここでも内在的な対話が形成されるのだ。

魏連殳は，返事を出せなかったのは，切手を買う金銭もない，極貧の状態だったからだという。そして彼はこう語るのである。

「いまは率直に君に伝えよう。ぼくは失敗したのだ。かつて，ぼくは自分は失敗者だと思っていたが，いまはそれが違うと分かった。いま本当に失敗者となったのだ。かつて，ぼくに少しでも生きていて欲しいと願う人がおり，ぼくもそう望んだときは，生き続けることができなかった。いまはまったくそんな必要はないが，生き続けようとしている」。

「ぼくに少しでも生きてほしいと願う人」とはどういう人を指すのか。第三節で，予兆のように記されていた「死後その人のために泣く者」とそれは関わるであろう。テクストはその人について，さらにこう続ける。

「ぼくに少しでも生きてほしいと願った人，その人自身が生きられなかった。この人は敵におびき出されて殺された。誰が手を下したか，誰も分からない」。「この半年来，ぼくはまるで乞食だっ

た。いや実際乞食そのものだと言ってもよい。だがぼくにはやることがあり，そのためなら乞食でも，餓えでも，寂しさも，辛さも，望むところだった。ただ滅亡だけはいやだった。ほら，ぼくに少しでも生きてほしいと願う人の力とは，何と大きなことか」。

この人物について，林非は「彼は革命家であるはずだろう」と規定する（林非，198頁）が，「彼」と断定できるだろうか。これに対し李允経は，作者の心理において「許広平そのものと言って構わない」と述べている（李允経，208頁）。つまりは，魏連殳を愛する恋人という推定である。これに異論はない。

魯迅の伝記事実との対応を考慮するならば，李も指摘するように，1926年6月17日付け，李秉中宛て書簡を参照すべきであろう。そこではこう述べられている。「私は最近突然，まだ生きていたいと思うようになりました。なぜかというと，話せば少々滑稽ですが，この世に私が生きることを望む人が何人かいるためです」。また26年11月20日付け許広平宛の手紙でも，こう述べている。「[道を同じくする者が] 一人いることについて，私はもとより慰められますし，それによって私に多くの勇気を与えてくれますが，その人が私のために犠牲になることが心配です。（中略）[道を同じくする者は] そんなにたくさんは要りません，一人いればいいのです」（黄仁沛編，237頁）。

注意しておきたいのは，短い間だがここに，「孤独者」とは位相の異なる，魏連殳の二番目の生き方が提示されていることだ。「生きていて欲しいと思ってくれる人」つまり「愛してくれる者」のために生きようとするのは，祖母や，結婚そのものを拒んでいた従来の魏連殳の生き方，狭義の「孤独者」とは異なるからである。

だから魏連殳の手紙のなかで「かつて，ぼくは自分は失敗者だと思っていた」という「かつて」[先前] は，祖母の葬儀で号泣した魏連殳のことではない。それは「半年来」「乞食そのものだ」という時期の魏連殳を意味する。恋人のために生きようとして，生きるすべがなかった時期を，「失敗者」だと思っていたというのである。

その半年前といえば，彼が辞職して失業した後の時期であり，ちょうど「私」が魏連殳を心配して訪れた頃であった。そのとき「蚕の繭」の話を語り合い，彼が「死後その人を泣く者」に言及したのであった。このときに「生きていて欲しいと願う人」の影がすでに見え隠れしていることになる。この対話の時期は，実は二つの生き方の狭間にあったことが想定されるのだ。

再び現実の作者について触れておけば，魯迅が許広平に対して，恋愛感情を確認したのは，王得后によれば，このテクストが書かれた25年10月と同じ年の，6月25日であったという（王得后，324頁）。魏連殳の手紙は，12月に書かれたことになっているので，それはその半年前に当たる時期と偶然にも符合するが，単なる偶然かどうか，興味深いところである。

その人物が許広平だ，という先の仮説を認めれば，現実の作者の場合は，この二番目の生き方を生きたことになる。しかしテクストでは，この生き方それ自体は，大きなテーマとはなっていない。テクストでは，この生き方は，未完のまま実現できなかったからだ。そう描いたのは，魯迅の当時の心境として，それを主題化できるだけの覚悟はなかったこともあると思われる。だがそれよりも，「生きていてほしいと願う人」を失った場合に生ずるであろう，つぎの第三の生き方を，前景化させる必要が大きかったのではなかろうか。

魏連殳の手紙は，こう続けている。「私自身は，私が生きていてほしくはないという人のために，生きていようと思った。幸いに，私にちゃんと生きてほしいと願う人は，もういなくなったし，もう悲しむ者は誰もいないのだから。そういう人を，私は悲しませたくはない。だが，もういない，一

人としていないのだ。愉快なことだ，気持ちのいいことだ。私はかつて憎しみ，反対したすべてを履行している。かつて心を寄せ，主張した一切を拒絶している。私は本当に失敗したのだ――だが，勝利したのだ」。

「失敗した」ということは，具体的には，魏連殳が軍閥の杜師団長の幕僚という職に就いたことを意味している。幕僚とは，軍人官僚の顧問秘書的な役割で，おもに公的，私的な文書の作成に携わる。伝統的には，科挙で意に添った結果を得られなかった知識人が，世に出るもう一つの方途でもあった。一般的に言えば，改革を志していたはずの者が，体制側に「転向」したと言えるわけでもある。

魯迅は同郷出身の軍人陳儀と面識があった。李允経によれば，教育者として文筆家として，前途が閉ざされそうになったとき，魯迅は生活のため，陳儀の幕僚になるという道も考えないでもなかったという（李允経，203頁）[(7)]。李は，魏連殳のこの行動が，作者自身にあったかも知れない可能性を示しているのだ。「堕落」は必ずしも，単なる想像力の産物ではなかったらしい。

それでは，引用最後の「だが，勝利したのだ」というのは，どう解釈したらよいだろうか。それにはまず第五節で語られる，幕僚となった後の魏連殳の姿を参照しなければならない。林非が指摘するように，魏連殳は幕僚となったのち，「何ら不当なことをしたわけではない。ただ世の中を馬鹿にしたような態度を取っただけである」（林非，196頁）。

魏連殳は充分な収入があっても，それを湯水のように使い果たした。「今日買い込むと，次の日には売っ払ってしまう」。だから死後には何も残っていないのであった。大家の住んでいた母屋に移ってからは，ほとんど毎日が酒宴で，「喋るわ，笑うわ，唱うわ，詩をやるわ，マージャンをやるわ……」という乱痴気騒ぎであった。

大家やその孫たちへの態度も変った。高価な漢方薬をもらうと，それを中庭に放り投げ，大家に向かって「老いぼれ，飲んで見ろ」と言うのであった。かつてあんなに愛護していた子どもについても，大家の口からはこんな表現がされる。「あのお方は，以前は子どもが親爺を見るより，子どもを恐がっていました」。それは子どもに嫌われてショックを受けたころの話だ。「ここのところはまったく違って，喋ったり，騒いだり，大良たちもあの方と遊ぶのが大好きで，暇さえあれば，お部屋に行っていました。あの方も色々な手でからかって下さるの。物をねだると，犬の鳴き真似をさせたり，頭をぶつけて御辞儀をさせたり，それはもう大騒ぎ」。

そんな「世の中を馬鹿にし」[玩世不恭]，自分に対しても投げやりな生き方をしたあげく，魏連殳は吐血をし，肺病で病死してしまう。金ぴかの肩章の着いた軍服を身につけて棺に横たわっている，魏連殳の死に顔を「私」はこんな風に描写するのだ。「彼は不似合いな衣装のなかで，静かに横たわり，目を閉じ，唇を閉じていた。口元には冷たい微笑を浮かべ，この滑稽な遺骸を冷笑しているかのようであった」。

李允経は，「このようにして彼は，魂の自己崩壊によって，肉体の一時的な存続を図り，自嘲的なスタイルと，世をあざ笑う冷眼で，社会に対して思い通りの報復を行い，生命の終了に至ったのである」と述べる（李允経，210頁）。また王暁明は「最後の自滅的な滅亡ですら，暗黒に対する報復であり，ある種，自己の腐敗によって社会の腐敗をさらに激化させようという意味がおおいにある」（王暁明，105頁）と述べる。これらは，祖母の葬式の時とった魏連殳の行動に対する評価とほぼ同様であろう。

李も引用するように，当時の魯迅に，こうした「復讐」の発想があったことは事実である。たとえば，魯迅はこんな事を述べていた。「私が酒を

やめ，肝油を飲み，寿命を延ばそうとするのは，必ずしも私を愛する者のためではなくて，大概はやはり私の敵――彼らに格好をつけさせて，敵ということにしよう――のためであり，その十全な世界にもう少し汚点を増やしてやろうとするためなのだ」（『墳・題記』『魯迅全集』第1巻，4頁）。

そうすると，「勝利した」とは，「敵」に対する「復讐」に成功したことを意味するのだろうか。それにしては，現実の魯迅とは違い，魏連殳は「死に急ぐ」ような生き方をしたのではなかったか。

一方林非は，この「勝利」についてこう述べている。「彼は怒りを抱きながら，じりじりと自らを傷つける道を歩んだ。こうして彼の言う「失敗」になったのである。しかし，死に至るまで，暗黒社会とつるむことはなかった。こうして，彼の言う「勝利」を獲得することになったのである」（林非，197頁）。この解釈は，「勝利」について余りに消極的に捉えすぎてはいまいか。

そこで竹内好はというと，このテクストにつぎのようなコメントを残している。「その愛するものが失われたいま，彼は愛するもののためではなく，憎むもののために，生きられるようになる。つまり，自分が以前に憎み，反対した一切のものになり，自分が以前に崇拝し，主張した一切のものにならぬことで，彼は失敗者であると同時に勝利者である。［中略］つまり，彼が生きるとは，彼が自分を憎むということである」と（竹内，54－55頁）。

そしてここから竹内魯迅が，つぎのように組み立てられていくのだ。「彼［ここでは魏連殳はそのまま魯迅である］は善の資格をもって悪を批判することに「失敗」した。新しいもの（それは彼に善だ）の資格で古いもの（それは彼に悪だ）に対抗することに失敗した。その結果，古いものであり，従って悪であるものをもって，古いもの＝悪を破壊しようとするのだ。絶望をもって絶望を克服しようとするのだ」（同上）。これは，竹内魯迅の骨格をなす，基本的枠組みの一つである。

これらいくつかの注釈は，それぞれそれなりの根拠をもつであろう。ただ筆者としては，魏連殳の前の二つの生き方との比較において，この三番目の生き方を考えておきたい。魏自身が手紙で語っているのである。「愛してくれる者」を失い，従って「私にちゃんと生きてほしいと願う人は，もういなくなった」。「私」が「悲しませたくはない」者は「一人としていないのだ。それは愉快なことだ，気持ちのいいことだ」と。

一番目の生き方と二番目の生き方は，異なっているけれども，共通する点もある。それはなにがしか，枠にはめられ，自分が抑制される側面をもつということである。狭義の「孤独者」は，社会からはみ出ているようであっても，実はそうなのではない。魏連殳も彼の祖母も，宗族共同体からなかば排除されているが，その帰属を根底から否定はできない。そもそも二人の関係が，一面では，孝的な結びつきであったことを忘れるわけにはいかないのだ。

それに魏連殳が意識している，進歩の観念，子どもの世代のために「橋渡し役」になろうという思いもまた，別の意味で彼の生き方を，枠付けし限定していると言うべきであろう。こうした枠付けは，魏連殳のなかで既に内面化されさえしたものだ。

この時期，魯迅は許広平宛ての手紙のなかで，自己の思想的位相をつぎのように分析していた。「じっさい私の意見は分かりやすいものではありません。そのなかにたくさんの矛盾が含まれているから。私に言わせれば，「人道主義」と「個人的自由主義」［個人的無治主義］という二つの考えがせめぎ合っているということかもしれません。それで突然人を愛し，突然人を憎むのです」（黄仁沛編，69頁）。だから「人道主義」と「個人的自由主義」というタームで，テクストを分析す

ることも不可能ではあるまい。この両者が『酒楼にて』における呂緯甫の形象と語り手「私」の位置にも，対応しているということができよう。

『孤独者』においては，魏連殳の初めの生き方が，呂緯甫よりはるかに頑強だが，この「人道主義」のある側面に対応するのではないか。逆にある意味では，真の「人道主義者」はみんなや他者のために生きようとするため，「孤独者」にならざるを得ないということでもある。それらの枠や制限が，時代や社会環境によって押しつけられ，魏連殳はそれを引き受けざるをえなかったのだ。

二番目の生き方，「私にもう少し生きてほしいと願う人」のために生きるというのは，最初の生き方と違うことは，既に述べた。それは「人道主義者」や「孤独者」のような一般化されたものではなく，もっと個別的な関係を支えにして，生きることである。だがこの場合でも，その人のために「ちゃんと生きる」責任が生じるとともに，その人の人生を巻き込んでしまうことにもなるだろう。たとえば王暁明は，魯迅が許広平との愛をかち取り，同居するに至ったことについて，こう述べている。「余りに多くの苦痛によって取り替えた幸福とは，それ自体もう幸福なのではなく，大きな借財にすら変わってしまい，受け取る者の背骨に重くのしかかるだろう」と。(王暁明，129－130頁)。

だから愛する者として，これからの生涯を共に生きる決意が必要なのだ。最初の生き方の枠とは違って，それは自ら選び取るべき枠ではあるが，しかし枠付けであることには変わりない。テクストでは，魯迅がこのテーマを回避したことも，既に触れたことである。

第三の生き方は，その愛する人を失ったことが致命的であったにしても，それは同時に，その枠から自由になることでもあったと言えよう。「愉快なことだ，気持ちのいいことだ」というのは，逆説的な表現でもあるが，別の真実を語っているだろう。そして「勝利した」というのは，そうした内面化された一切の枠付けから，自由になったということを表しはしないだろうか。つまり，「せめぎ合う」もう一つの考え，「個人的自由主義」に身を委ねることでもある。

たとえば，林非のこんな比較の視点に注目したい。「魏連殳の性格は，［アルチィバーシェフの］『労働者シェビィリョフ』の登場人物といくらか似たところがある」。「彼らの思想的重荷はほとんど同じものであり，彼らが暗黒社会に対して取った，強烈な否定の態度，そこから発する内心の反抗は，きわめて合致している」(林非，204頁)。

シェビィリョフは，社会を改革し，民衆を救おうと志すが，かえって民衆から迫害され，憤りのあまり，社会全体に復讐しようと企て，劇場で民衆に向かって，無差別に発砲する。魯迅は，この小説を1921年に翻訳していた。イプセンの『民衆の敵』と同様に，傍観者的民衆によって，先覚的な改革者が追いつめられる物語の系譜にあると言えよう(8)。

むろん林非が強調したいことは，むしろ両者の大きな隔たりの方であった。なぜなら復讐の対象は，シェビィリョフにとっては，外在的な大衆だが，魏連殳にとっては，竹内も指摘するように自己そのものであったのだから。しかし，外向的と内向的と方向が違っても，自己破滅的な心情としては，明らかな共通性が見てとれることも事実であろう。そして，このシェビィリョフについて，魯迅はこの当時こう語っていたのである。

「［社会が個性を摩滅させているという］この種の大勢を徹底的に破壊しようとすると，たやすく「個人的無政府主義者」になってしまいます。『労働者シェビィリョフ』に描かれているシェビィリョフがそうです」(黄沛仁編，12頁)。

「個人的無政府主義」は「個人的自由主義」［個人的無治主義］をさらに極端にしたものと言えようか。シェビィリョフは「個人的自由主義」

の極北を表すが，魏連殳の最期はその内向的な一族であったろう。『酒楼にて』を参照していえば，その語り手「私」は「個人的自由主義」者のようであった。このことを考えあわせると，『酒楼にて』では後景化していた語り手「私」のような存在を前景化し，あらわに，その極致を示したのが，魏連殳の三番目の生き方だという想定も導き出されるのである。そのように考えれば，『酒楼にて』と『孤独者』の二つのテクストが，ネガとポジの関係になっている意味も，もう少し奥行きをもつことだろう。

この生き方に，ある種の「復讐」の色合いがあることは，当然窺える。だがテクストは，そんな野放図な生き方の行き着く先を，既に記述したのではないだろうか。物語は三番目の生き方が，結局どうなるかを描いたはずなのである。それは自己破滅以外にはありえないと。

Ⅵ.「孤独者」の埋葬

そこで物語の最後の場面に触れよう。「私」は，魏連殳の寂しい葬儀に出くわして，参列したものの，その棺を見送るに忍びず，中庭から出ていってしまう。そんな「私」はこう語るのだ。

「私は歩みを早めて行った。まるで何か重たいもののなかから飛び出そうとしても，できないかのように。耳のなかでは，何かがもがいており，それが長い間続いて，やっともがき出てきた。それは長い叫びのようで，まるで傷ついた一匹の狼が，深夜，荒野に遠吠えをするように，凄惨の中に憤りと哀しみを滲ませていた。

私の気持ちは，そこで軽くなり，ゆったりと湿った石の道を歩んでいった。月の光のもとで」。

傷ついた一匹の狼の描写は，第一節で祖母の葬儀の際，魏連殳の号泣について，使われたことばと同一である。こうして魏連殳の最後の生き様を知る以前は，この葬儀を「退屈に感じ，たいして哀しみも感じていなかった」のに，「私」はここでは激しく心揺さぶられているのだ。「私」もまた，魏連殳や彼の祖母に連なる「孤独者」の一族であること，少なくともその理解者であることが示される。

けれども「私」はそのもがいた叫びの声を吐き出すように，その葛藤を脱ぎ捨てていってしまう。これについても，解釈は簡単ではない。たとえば王暁明は，こう述べている。「中国の暗黒に直面して，呂緯甫のような軟弱な人は意気消沈するだろうが，魏連殳的な頑強な人も同様に絶望するというのだろうか。このような問いを前にしては，結末でいかに「私」が足早に抜け出しても，読者の視線を移すことは難しいだろう。『酒楼にて』と比較して，作者の「幽気」に対する探求は大いに深まっているのである」(王暁明，105頁)。そして王は，作者は創作によって内心を探索し，「幽気」を追い払おうと試みたが，その内心のドアを「余りに大きく開けすぎて」不安になり，これに失敗したというのである（王暁明，107－108頁)。筆者はこれには賛同できない。

魏連殳の生き方には，三つあることを述べてきた。テクストで掘り下げて描かれているのは，第一の狭義の「孤独者」の形象と，第三の奔放で自己破滅的な幕僚の形象とであった。これが「人道主義」と「個人的自由主義」に対応しているのではないか，というのが筆者の仮説であった。そして最後に，やはり「孤独者」の系譜を受け継ぐ，語り手によって，この作者の心のなかで「せめぎ合っている」両者は，魏連殳の肉体とともに埋葬されるのである。

別の観点では李もこう結論づけている。「連殳の死去は，魯迅が造成した墳墓であり，古い私の埋葬であって，そこに未練がないわけではない。しかし一方では新しい「私」の探索でもあり，その後の途を予見させ，彼［魯迅］が新しい途のなかで，見事で幸せな人生を獲得するだろうことに，深い慰めと喜びを感じさせるのである」（李允経，

213頁)。これは余りに楽観的にすぎる解釈ではあろう。しかしこのテクストが，ささやかだが重要な一歩であったことには違いあるまい。

むろん，この危機の葬送によって，すべてが新たになった訳ではない。未来に選択されるべき，テクストにおける第二の生き方に対して，決定的な決断がされたのでもない。直後に『傷逝』が書かれなければならなかったのも，その決断の準備と関わっていたのだろう。そもそも既述のように，許広平との同居について，作家魯迅としての躊躇は，ここから1年後においても続いているのだ。

それでも，ここには従来の自己に対する総体的な告別が，すでに予告されていると言っていいのである。こうして『孤独者』は，魯迅が従来の自分からもがき出て行こうとするその瞬間の姿勢を描いたのであった。『彷徨』の世界は，この4日後に書かれた『傷逝』とともに，大きく転回し始める。『孤独者』は竹内が語るように，まさしく魯迅の実存を証すスリリングなテクストと言えるのであった。

[注]

(1) 二人の不和決別については，中島長文と王錫栄を参照した。筆者なりの推測はあるが，ここでは紙幅の関係から詳述しない。

(2) 以下，魯迅のテクストはすべて人民文学出版社1981年版『魯迅全集』に従い，そこからの拙訳である。

(3) ただし魯迅が帰国後に紹興中学堂で教えたのは，博物学と生理生物学であった。

(4) ただしここでリーは，中国語“孤独者”を英語misanthprope（人間嫌い，厭世家）と訳しているが，後に述べるようにやや異議がある。

(5) なお太原は太谷，済南は歴城と別名を使っている。

(6) なお林非は，この部分について，封建勢力の強大さを強調しているが，これには賛成できない（林非，200頁)。

(7) 魯迅の言葉としては，孫伏園『魯迅先生二三事』を挙げている。

(8) 翻訳当時の作者のこの物語に対する共感は，「訳了『工人恵略夫』之後」『全集』第10巻，165－170頁参照。その後の魯迅自身による，この小説への言及は，『華蓋集続編』「記談話」，『全集』第3巻，355－359頁参照。

[参考文献]

・黄仁沛責任編集『魯迅景宋通信集　《両地書》的原信』湖南人民出版社，1984年。

・Leo Ou-fan Lee “Voices from the Iron House　A Study of LUXUN” Indiana University Press,1987.

・李允経『魯迅的情感世界』北京工業大学出版社，1996年。

・林非『中国現代小説史上的魯迅』陝西人民教育出版社，1996年。

・中島長文『ふくろうの声　魯迅の近代』平凡社，2001年。

・竹内好『竹内好全集・第2巻』筑摩書房，1980年。

・王得后『《両地書》研究』天津人民出版社，1995年。

・王錫栄『魯迅生平疑案』上海辞書出版社2002年。

・王暁明『無法直面的人生　魯迅伝』上海文芸出版社，1993年。

・周建人『魯迅故家的敗落』福建教育出版社，2001年。

・周遐寿［作人］『魯迅小説中的人物』上海出版公司，1954年。

・胡風「魯迅先生」『新文学史料』1993年第1期。

・尾崎文昭「「酒楼にて」および小説集『彷徨』――虚空に彷徨する精神」『しにか』大修館書店，1996年11月号。

・湯山トミ子「母子分離を越えて――二人の眉間尺・黒い男・母性――」日本現代中国学会『現代中国』第74号，2000年。